

句集『春夢草』における『源氏物語』作中和歌の受容

八 神 三砂子

はじめに

肖柏は、三条西実隆、近衛尚通に『源氏物語』の講釈をおこなっており、古典研究の第一人者である。そして、一条兼良と宗祇の講釈を聴聞して『源氏物語聞書』を残し、それは、やがて、三条西実隆の手によって『弄花抄』の中に取り入れられたのである。

肖柏の家集『春夢草』には、連歌集と歌集の二種類があり、同名で呼ばれている。連歌集には、発句だけの集、付句だけの集、発句付句を合わせた集の三種類があり、それぞれに注のある本が伝えられている。

肖柏の句集『春夢草』の古注釈は、四種類が現存しており、次のようである。

第一種（内閣文庫本）は、付句だけの注で、肖柏からの聞書と見られる。

第二種（太田本）は、発句だけの注で、肖柏の門人によって書かれている。

第三種（桂宮本）は、発句と付句の揃った注で、注者は未詳である。

第四種も発句、付句の揃ったもので、注は桂宮本と別注であつて、注者は未詳である。

内容は、付句集には、約五百句を春・夏・秋・冬・恋・雑に部類して各句に注を施し、句数は、内閣本五百句に対して、桂宮本の四百九十五句と五句の違いが見られる。発句集には、太田本四百五十六句、桂宮本四百六句が収められている。

注の内容には、明らかな違いがみられ桂宮本は、付け方や句の姿について、「取なし」「付なし」をいい、「なりの句」を指摘する。当時としては、ごく普通の術語を用いて、ありのままに説明し、しかも適切で肖柏に近い時期の成立を思わせるものがある。内閣文庫本付句注は、肖柏の門人たちの手で、肖柏からの聞き書きも交えて書かれたものかと思われる。

肖柏が、句集『春夢草』において、連歌の句作に『源氏物語』を、どのように取り込み尊重したかの研究に当たって、第一種内閣文庫本¹⁾を取り上げ、参考として第三種桂宮本の付句注を用いることにする。

本稿では、古注釈が『源氏物語』の和歌を本歌と指摘している例を取り上げ、内容から以下三つの種類に分ち論じてみよう。

一 『源氏物語』の作中和歌の詞が、前句、付句にわたって取られている例

ゆかりにさへもあかぬ面影

若草の露の木の本花朽て

(春一四四)

前句思ふ人のゆかりまであかさるよし也、付る所ハ春の若草を花のゆかりに取なし侍り、本哥にも草のゆかりに云事也、ねハみねと哀とそ思ふむさしの、露分侘る草のゆかりを

この句は、若紫巻で、光源氏が少女(後の紫の上)に手習いなどを教え歌を詠み交わした際、光源氏の詠じた

ねハみねと哀とそ思ふむさしの、露分侘る草のゆかりを

いつしかも手につみてみん紫のねにかよひける野への若草

〔現存本「手に摘みていつしかも見む紫の根にかよひける野辺の若草」〕

の二首の歌に基づく。本歌、一首目の歌は、まだ共寝はしないけれども、いとおしくてならないことだ、逢おうにも逢えない武蔵野の紫草（藤壺）のゆかりの人（紫の上）が、（以下、本歌の現代語訳は、新潮日本古典集成による。）の意であり、二首目の歌は、桂宮本注のみが挙げるが、この手に摘み取って、早くわがものとしたものだ、あの紫草（藤壺）ゆかりの少女を、の意であり、少女を恋する人の形代として手に入れたという願望の表現となっている。

前句は、花（藤壺）のゆかり（紫の上）に飽き（ることの）ない藤壺の面影を見ており、付句では、若草（紫の上）の露は儂く、木の根元の花（藤壺）は、死ぬことでしよう、の句意であろう。

肖柏は、『源氏物語』の物語の内容を飛躍させて、発想の転換を図り、藤壺から紫の上へと、世代交代を暗示し、花（藤壺）を死なせることによって、人生の無常感を前面に押し出した句作りとなっているようである。

「面影」と「花」を寄合として、紫の上と藤壺を暗示して、「春の若草」を「花のゆかり」に取りなしている。

この句は、光源氏の詠む、若紫巻の二首を本歌とし、その全体の場面を背景にしながらい人生訓の意味合いが濃厚であると考えられるのである。

さとなきのへの松の哀さ

藤かほる池ハ水草に春くれて

（春一七八）

旧跡のさま也、池もかきハラひし跡もなく、松にかゝれる藤ハかり昔の名残に咲にはふと也

本哥

藤浪のうち過かたくみえつるは松こそやとのしるし成けれ 源氏よもきふの巻の哥也、此面影也

この句は、蓬生巻で、光源氏が花散里を訪ねる道すがら、常陸の宮邸の前を通り、「おほきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、」のを見て、光源氏は、未摘花を思い出し、再会した時、光源氏の詠じた

藤波のうち過かたくみえつるは松こそやとのしるし成けれ

の歌に基づく。本歌は光源氏が、松に掛かる藤の花を通り過ぎがたく思ったのは、松に見覚えがあったからでした、変わずに待つ、そのことが思われたからでした、の意である。

前句では、人の住む里もない寂寞とした野原に立つ松の木が哀愁を誘う。付句は、住む人も居ない屋敷の庭に、藤の花が爛漫と咲き誇り、匂いを迎りに満ち満ちさせているが、一方、池には水草が掻き払われもせずに生い茂り、春が過ぎようとしている叙景の付合となっている。

内閣本注が指摘するように、「源氏よもきふの巻の哥也、此面影也」とあるように、肖相は、前句の「松の哀」に末摘花の住む荒廃した邸宅の様子を思い浮かべ、前句の「松」から、付句「藤」を導き出して、「松」と「藤」を寄合として蓬生巻の松に掛かる藤を暗示したものであろう。

うはの空なる月のよひく

たか宿もたゝく水鶏にはかられて

(夏二二八)

をしなへてたゝく水鶏におとろかほうはの空なる月もこそいれ

心から竹田のさとにふしなれて幾夜水鶏にはかられぬらん

二首の本哥にて付たる句也、はかられてハたはからるゝ事也

この句は、濔標巻の、光源氏と花散里の贈答歌で、花散里の歌に対する光源氏の返歌として光源氏が詠じた
をしなへてたゝく水鶏におとろかほうはの空なる月もこそいれ

の歌と、俊頼の詠む

心から竹田のさとにふしなれて幾夜水鶏にはかられぬらん（永久四年百首。散木奇歌集）

の歌に基づく。本歌はどの家の戸でも叩く水鶏の音に、見境なしに門を明けていたら、上の空の月（いいかげんな気持の男）も入ってくるかもしれませんよ、の意である。

前句は、空の上の月の光りが夜毎にさしこむ情景を詠んだ句であるか、この「うはの空」を真実さのない意にとれば、「うはの空」は「いいかげんな気持」として、夜毎に訪れる「月」を「男」にたとえれば、「いいかげんな気持の男」の意になる。付句の意は、だれの家の戸でも叩く水鶏にだまされて、となる。

前句「うはの空なる月」が本歌の第四・五句にわたる。「うはの空なる月」をとり、付句「たゞく水鶏」が本歌の第二句「たゞく水鶏」をとる。「源氏物語」と俊頼の歌を本歌としたものである。

肖柏は、夜毎に繰り返される男性たちの女性訪問を古歌に託して、ユーモアたっぷりに描き、付合は本歌そのものの世界を持ち込み、本歌取りの真髓が発揮されているようである。

あやなき恋路思ひやめとよ

おりたゝは田子の恨や世々の末

（恋六五四）

袖ぬるゝ恋路とかつハしりなからおり立田子のミつからそうき 本哥の心也、おりたつとハ一向に是に成やうの事也、恋路のまよひ此世にかきるましき事也、大かたの時ハおもひやめとよ也、あやなきハ益なき也、あちきなきとおなし

事也

この句は、葵巻で、光源氏の訪れないままに、手紙が来たのに対し、六条御息所が歌を贈り光源氏が返歌する異常な状態の贈答の一回目の歌で、六条御息所の詠じた

袖ぬるゝ恋路とかつハしりなからおり立田子のミつからそうき

の歌に基づく。本歌は袖が濡れる泥田―涙にくれるつらい恋路―とは知りながら、その泥田に深入りするわが身が情けのうございます、の意である。この歌のことを『弄花抄』には、「此哥ことよろしき聞えあり」とあり、又『細流抄』にも、「此物語第一の哥と云々」「心はた、我身からの物思ひとなり」とある。

御息所が心情を言葉ではなく歌でしか自由に語れなかつた表現の最も優れた歌として、又、御息所と光源氏との恋の有り様が示唆的手段として、ここに浮上する。

『孟津抄』は、『伊勢物語』「百七 身をしる雨」の贈答歌二首を引く。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ

この歌は、『伊勢物語』には、詞書はないが、『古今集』（六一七、六一八）には、「業平朝臣の家に侍ける女のもとに、よみて、遣はしける」と詞書がある。

歌意としては、『伊勢物語』の第四句「袖のみひちて」と『源氏物語』の第一句・第二句「袖ぬるゝ恋路」、返し、『伊勢物語』の第一句・第二句「あさみこそ袖はひつらめ」と『源氏物語』光源氏の言葉「袖のみ濡るるや、いかに。深からぬ御ことになむ。」と、六条御息所への返歌「浅みにや人はおりたつわが方は身もそほつまで深きこひぢを」の、「袖のみ濡るるや」と第一句「浅みにや」が同意となる。

前句は、「あやなき恋路思ひやめとよ」が、恋は打算ではできないが、利益のない恋、恋の成就の見込みのない恋、に對する忠告めいた句である。

付句、「おりたゝは田子の恨」は、六条御息所の恨みは恨みとした句である。付句の中で、特に注目し値するのは、「世々

の末」であり、「世々」は、『伊勢物語』「二十一 おのが世々」「おのが世々になりにければ、うとくなりにけり」と、『源氏物語』胡蝶巻に、光源氏の詠む「籬のうちに根深くうゑし竹の子のおのが世々にや生ひわかるべき」とある歌等から、男女の仲が絶えて、別々に世を送ることの例として、挙げる事ができる。又、「末」は、「結果」として、光源氏の心の中では、六条御息所に対する恋情の薄れと、うとまじさが見られる「結果」として挙げる事ができる。

前句の「恋路」は、本歌の第二句「恋路」をとり、付句の「おりたゝは田子の」は、本歌第四句「おり立田子の」をとる。又、物語の中の一節を予想させるものがあり、それを受けて『源氏物語』中の御息所の詠んだ、「袖ぬるゝ恋路とかつはしりながらおり立田子のミつからそうき」の歌を念頭において構成された句である。

この句は、『源氏物語』・『伊勢物語』・『古今集』の三者を踏まえて、これを凝集させた感があるのである。

二 『源氏物語』の作中和歌の詞が、付句にのみ取られている例

前句の中には、『源氏物語』の作中和歌の詞と思われるものを特に見出せないが、付句には、和歌の詞があり、前句、付句を合せた場合、明らかに物語の一節を予想させるものが認められ、『源氏物語』の巻々の歌を念頭において構成された句、二例を考察する。

なるともなしに恋しさそそふ

かけたした、花たち花に身のむかし

(夏二二六)

前句ハ恋也、橘の実に身をよそへていへり、たちはなハむかしを恋る妻也、橘によそへても我身のむかしをはおもひかけしと也、ならぬ事ゆへむかしを恋る事のまさる由也、袖のかによそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそす

れ

この句は、胡蝶巻で、玉鬘が光源氏の詠み掛かけに対して応じた

袖のかによそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

の歌と、桂宮本注（第三句以下なし）が挙げる『古今集』（二二九）の歌、

五月まつ花たちはなの（香をかげば昔の人の袖の香ぞする）

の歌に基づく。本歌は玉鬘が、光源氏にお母さんにそっくりですと詠み掛けられたのに対して、亡き母にそっくりだとのことですので、わが身も母と同じようにはかなく終わるのではないかと存じます、の意である。『古今集』の歌は、『岷江入楚』にも、引かれており「花たちばな」の詞と「昔の人の袖の香ぞする」との下句の句との詞句、発想を踏まえているものかとも思われる。『源氏物語』と『古今集』の歌を本歌としている。

前句は、自然に（知らず知らずのうち）恋しさが増すという恋の句である。付句は、心に懸けまい、単に、花たち花（むかしを恋る妻）のために、我が身の昔のことを、とした句で、前句の恋心から、付句では、恋心を昔の事、過去の事とした、恋の儂さと共に昔を懐かしむ句である。

内閣本注が指摘するように、「前句ハ恋也」とあり、付句の意は、「橘の実に身をよそへていへり、たちはなハむかしを恋る妻也」とある通りであろう。

前句の「恋」に「たち花の花」を付けて、「むかしを恋る妻也」とあるように、付句で、「橘の花」玉鬘の母、夕顔を思い出し、今は亡き夕顔の忘れ形見に昔日の恋の思い出を重ね合わせて付けた句のようである。

待夜むなしき袖のしら露

下荻の風のたのめにむすほ、れ

（恋五三六）

風のたのめとハあたる約束の事也、虚空のたのめに心をつくし、涙にむすほゝるゝよし也

ほのめかすかせにつけても下萩の

この句は、空蟬巻で、光源氏は心ならずも、軒端萩と契るはめになるが、夕顔巻で、光源氏と軒端萩との贈答の歌で軒端萩が詠じた

ほのめかす風につけても下萩のなかはは霜にむすほゝれつゝ、(桂宮本注)

の歌(内閣本注は上句のみ)に基づく。本歌はあのことをほのめかされるお便りにつけても、萩の下葉が霜に当たつてしおれているように、(賤しい身にはまれのお尋ねがうれしいながら)なかばは思いしおれているのでございます、の意である。

前句は、「待夜むなしき袖のしら露」の句意から、待ち焦がれてむなく涙にむせぶ女の姿、軒端萩の心情を両古注釈は指摘する。付句を直訳すると、萩の下葉が、風をあてにして結ばれて、となるが、内閣本注の説に従えば、「風のたのめとハあたる約束の事也」とあり、萩の下葉が「実のない約束事に取り残されて、」となるようである。

肖柏は、句を付けるに当たつて『源氏物語』夕顔巻の本歌と同じ発想で、軒端萩の歌を挙げてゐるのは、心憎いばかりである。前記の句は、付句によつて前句、付句の両者が生き生きと輝きを増した例として注目に値する。

三 その他の例

前句の中には『源氏物語』の作中和歌の詞があるが、付句には『源氏物語』の作中和歌の詞がない句と、前句、付句にこだわらず物語構想を撰取した句、句全体の真意が、明らかに『源氏物語』の作中和歌に依つてゐる句二例を考察する。

行とも夢に道やまとハハ

あかさりし月の都を心にて

(秋三三三)

月のミヤこ、爰にて八月の宮の事にハなし、都の事也、ミヤこを遠くはなれきて、立帰り夢路も道やまよハハんと也、源氏に藤壺中宮大裏を退出し給ふ時、源氏の御哥 月のすむ雲井をかけてしたふ共この世のやミに道やまよハハ

この句は、賢木巻で、光源氏が出家した藤壺の御前に参上した際、東宮への返事を藤壺にかわつて光源氏がする場面で、光源氏の詠じた

月のすむ雲井をかけてしたふ共この世のやミに道やまよハハ

の歌に基づく。本歌は今宵の月のように、心澄むご出家の境地をお慕いしようとしても、私はやはりこの世の煩惱に迷うことでしょう、の意である。

桂宮本注には、「此世はこをおもふやみの心也」とある。この詞の引歌として、『後撰集』(一一〇二)・『大和物語』(四十五 心のやみ)で兼輔の詠む、次の歌が挙げられている。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬる哉

『大和物語』では、この歌を、藤原兼輔が醍醐天皇の御息所となった娘桑子のことを案じて帝に奉った歌となっている。前記の句は、前句の「道やまとハハ」が本歌結句「道やまよハハ」(校異―〔内〕道やまよハハ〔桂〕なをやまよハハ〔源氏〕なほやまとはむ)をとり、付句の「月」一語、又は「月の都」が本歌の第一句「月」、第一句、第二句にかけて「月のすむ雲井」と、一見、詮とする詞を上・下句に分けてとる歌と同様の本歌取りの手法が連歌に転用されているようにみえるが本歌取りとは認め難い。

内閣本注の中に、「月の宮」という詞を指摘しているが、須磨巻で光源氏の詠んだ「見るほどぞしばしなくさむめぐりあはむ月の都は遥かなれども」の歌を挙げていない。八月十五夜、光源氏が須磨の住び住まいの中で都を懐かしく思い詠

んだ、この歌の方が、前記の句の心意にそつたもののように思われる。

肖柏の心意は、前句に対して、付合の意味も、都を遠く離れて、月を見る間だけしばらく心が慰められ、都に再び帰れる日は、はるか先ではあるけれども、立ち帰る夢を見る時さえも、私はやはり道に迷うことでしよう、という句意である。付句は、都を懐かしく思う心中の披瀝となつてゐるようである。

みすもあらぬをうきになさはや

春の夜の夢の間もなきしの、めに

(恋五四六)

※この句は、内閣本注は欠字多数のため、桂宮本注を挙げる。

みすもあらぬとは、ほのかにみたる心也、春の夜の夢のはかなきことく、ほのかにあひたる人なれば、中くうき面影になして忘はやと也

みても又あふ夜まれなる夢の内に やかてまきるゝわか身ともかな

春の夜の夢はかりなる手枕に也」

この句は、桂宮本注が指摘するように、若紫巻で、藤壺が宮中を退出、里下り中、光源氏と藤壺との切ない一夜の逢瀬で、光源氏と藤壺との贈答の歌で光源氏の詠じた

みても又あふ夜まれなる夢の内にやかてまきるゝわか身ともかな

の歌と、『千載集』(九六四)(桂宮本注は下句なし)周防内侍の歌、

春の夜の夢ばかりなる手枕に(かひなくたたん名こそをしけれ)

の歌に基づく。本歌はお逢いしても再び逢うこともむつかしい、夢のような逢瀬ですので夢の中にこのまま消えてしまいたい思ひです、の意である。

『源氏物語』の光源氏の詠む「みても又」の歌に関連する『伊勢物語』（九十九 ひとりの日）在原業平の詠む見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ

この歌は、『古今集』（四七六）にも入集しており、詞書を持つ。又、『大和物語』（百六十六 女車の人）に似た内容だが、女の返歌は異なる物語がある。『源氏物語』の光源氏の詠む歌の引歌として挙げられている歌は、「ほのかに見て恋う」男の歌としての贈歌である。

前句「みすもあらぬ」は、「見ずもあらず」として、前述の通り、業平が、ほのかに逢った女に贈った歌、「見ずもあらず」の歌の初句を踏まえているようである。『古今集』の詞書は「右近の馬場の引折の日、向ひに立てたりける車の下簾より、女の顔の、ほのかに見えければ、よむで、遣はしける」とあり、この歌の場面を背景にしていると考えられる。

前記の句は、前句が「みすもあらぬ」と、ほのかに逢った、藤壺との切ない逢瀬が、付句では「春の夜の夢」のような夢の中の出来事として、忘れてしまいたいという、二人の心情が込められているようである。

両古注釈には、『伊勢物語』の歌は引かれていない。しかし、桂宮本注は、『千載集』の歌、「春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたたん名こそをしけれ」を挙げている。

桂宮本注は、本歌として『源氏物語』の歌「みても又あふ夜まれなる夢の内にやかてまきるゝわか身ともかな」を引くが、前句、付句とも『源氏物語』の歌の詞はない。しかし、そこに表現されている内容が『源氏物語』の一節そのものと言つてよい句である。

『源氏物語』光源氏の歌と、『伊勢物語』・『古今集』・『大和物語』の業平の歌と、『千載集』の周防内侍の歌とを踏まえて、これを凝集させた感があるのである。

むすび

句集『春夢草』における『源氏物語』の作中和歌を本歌としている句は私見によれば二三例有り、本稿では紙面の都合もあり、八例を考察したが、肖柏が、どのように、自分の作品の中に、『源氏物語』の和歌を取り入れイメージ化しているかを、内閣文庫本付句注を中心にして考察することに専念した。

作品を論ずる場合、基準をどこに置くかが、重要なポイントになるが、本稿では、『源氏物語』の作中和歌の詞が「前句付句にわたって取られている例」四例、「付句にのみ取られている例」二例、「その他の例」二例の三つに絞って検討を進めた。

今回対象とした付句八例の内、内閣本注は和歌を七首引いており、一例のみ歌は挙げられていない。この一例の歌は、桂宮本注が引いている。歌を引く際のコメントとして、八例の内、「本哥にも草のゆかりに云事也」(春一四四)、「二首の本哥にて付けたる句也」(夏二二八)「本哥の心也」(恋六五四)「源氏の御哥」(秋三三三)等、四例が見られる。八例以外の一五例の内にも、①「又哥に」(秋二九六)②「源氏の御哥」(秋三九〇)③「かほる大将のうき舟に心をかけてよめる哥也」(恋五七〇)④「夕かほのよめる哥也」(恋六七二)⑤「玉かつらの君京へのほり給ひし船中の心也」(雑七四四)⑥「宇治の巻の哥也」(雑七八〇)⑦「この哥のよせ也」(雑八三八)等、詠み人の人名、巻名を示し、その歌の詩情・修辭にまで踏み込んだコメントを付け示している。又、⑦に「よせ」とあるように、本歌取りの技法のほかに、和歌における「よせ」の技法を明らかにしている。

『連珠合璧集』⁽²⁾に寄合とされているのは、①「面影―花」(春一四四)②「松―藤」(春一七八)③「そふ―かけ路」(夏二二六)④「宿―月」「水鶏―た、く」(夏二二八)「まがき―霧」(秋三九〇)「水―みぎは」(恋四六六・四八〇)⑤

「しら露―むすぶ」(恋五三六)の八例である。今回取り上げた八例における寄合は①―⑤の六例である。又、連歌付合には、「蟬―すずし」(夏二四二)「袖―露」(秋三九〇)の二例がある。これらは、全く一般的な寄合と言うべきであり、『源氏物語』を介在させるまでもなく、熟練した連歌師にとつては無意識のうちに口をついて詠み出される体のものであらう。

一方、付句八例を、『源氏小鏡』⁽³⁾『光源氏一部連歌寄合之事』⁽⁴⁾に挙げられている言葉と歌とを対照して見ると、「てにつみていつしかもみんむらさきのねにかよひけるのへの若くさ」(春一四四)が共通しているのみである。このことは、肖柏の句作に消化された『源氏物語』は、寄合書等、通俗的参考書を通してのものではなく、原典を直接読み込み、体得されたものであり、会席で自由に素材とされ得るまでにこなれた状態にあったことを物語っている。

肖柏は、三条西実隆のために『源氏物語』の講釈を宗祇の代講で務めた、という経歴の持ち主でもあり、『弄花抄』の著者でもあり、前句の詞、内容、表現に、『源氏物語』の作中和歌の詞を巧みに付合わせて、和歌の伝統的風雅を連歌で強調させることなど至極当然のことであらう。

宗祇は、「当時この物語(源氏物語)に深く心を得たる人、いかで多くは侍らむ」(『吾妻問答』)と述べている。連歌師連中に『源氏物語』が流布しているように見えても「深く心を得たる人」は少ない実情を、宗祇の言葉は端的に表している。

このような連歌界の『源氏物語』の受容の状況下にあった、肖柏の『源氏物語』作中和歌と寄合書との受容の状況を比較して見たが、『源氏物語』研究の第一人者でもあり、物語を熟知していて、寄合書に依存しない、連歌師肖柏の姿をいま見ることかできたようである。

注

- (1) 句集『春夢草』のテキストは、金子金治郎編『連歌古注釈集』所収の内閣本(付句)による。又、一部分桂宮本(『桂宮本叢書』)に依るところがある。なお、テキストに施されている古注釈を全文、各句の後に提示して解釈の助けとした。
- 『源氏物語』は新潮日本古典集成、日本古典文学全集による。『伊勢物語』『大和物語』は日本古典文学全集による。他の和歌は、『新編国歌大観』による。
- (2) 『連珠合璧集』は、『連歌論集(一) 中世の文学』(木藤才蔵・重松裕巳校注)による。
- (3) 『源氏小鏡』は、高井家本(編者武田孝)による。
- (4) 『光源氏一部連歌寄合之事』は、『一条良基連歌論集 三』(校者岡見正雄)による。